

父島

東京から約24時間
小笠原諸島の玄関口



父島はどこにあるの？

位置：都心から南に984km

面積：23.45km²

アクセス

航路：竹芝-父島（小笠原海運）大型客船で約24時間

CHICHIJIMA

OGASAWARA Islands



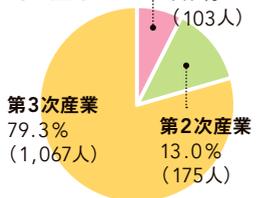
information

島の人々

人口：2,089人

世帯数：1,119世帯

島の産業



公共施設

役場：1

医療機関：1

小学校：1

中学校：1

高校：1

小笠原村の特産物

水産生鮮品：メカジキ、アカイセエビ、ワカハタ、ハマダイ、ソデイカ

水産加工品：海塩、カメ煮込み、メカジキカレー

農林産生鮮品：パッションフルーツ、トマト、ミニトマト、マンゴー、レモン、コーヒー

農林産加工品：ハチミツ、酎ハイ（島レモン・パッションフルーツ）、ラム酒、ジャム、唐辛子加工品

工芸品：タコノ葉細工、ガラス細工

小笠原村のシンボル

花：ムニンヒメツバキ

木：タコノキ

鳥：ハハジマメグロ

魚：アオムロ



パッションフルーツの花。



小笠原村の歴史

小笠原村は、南は日本最南端の沖ノ鳥島、東は日本最東端の南鳥島などの30余りの島々から成り立っています。近年では、2013(平成25)年末に海底噴火によって新島が現れ、小笠原諸島を構成する島のひとつである西之島と一体化して、現在も火山活動が続いています。

島は、1830(文政13)年までは無人島で、最初に欧米人や太平洋諸島民が住み始めたといわれています。その後、江戸幕府や明治政府の調査・開拓が行われ、1876(明治9)年に国際的に日本領土として認められました。昭和の時代になって太平洋戦争に敗戦。小笠原村はアメリカ合衆国の占領下に置かれました。1968(昭和43)年に日本に返還され、内地へ強制疎開させられていた多くの島民の帰島が叶うこととなりました。

自然との共生

返還後の現在、一般の人は父島と母島のみに住んでいます。父島は、小笠原諸島の玄関口として、年間約3万人の観光客を受け入れています。

海、山ともに楽しめる小笠原ですが、小笠原群島の大部分は小笠原国立公園に指定され、2011(平成23)年には世界自然遺産にも登録されました。一方で、固有種の動植物の保護が課題となっており、小笠原村では、エコツーリズムに積極的に取り組んでいます。

また、小笠原諸島は珍しい地質、地形の宝庫で、ポニナイト(無人岩)は、世界で初めて小笠原で発見されました。名前は小笠原の旧称、無人島ムネヒトに由来しています。

小笠原諸島
返還式



世界でも珍しい地質



ちひろいわ
千尋岩（ハートロック）

緑色の砂浜!?



初寝浦海岸

初寝浦海岸には、「ウグイス砂」と呼ばれる珍しい緑色の砂浜が広がっています。無人岩は風化侵食を受けると、風化に強い緑色の鉱物「古銅輝石」だけが残ります。やがて波に洗われて海岸に集まり、ウグイス砂となります。

長崎展望台



兄島瀬戸と兄島を望む展望台。川が流れるように早い潮流が見えます。

ジョンビーチ



ジョンビーチのある南崎周辺は石灰岩地帯で、白い砂浜が特徴。

小港海岸



不思議な模様をした岩石は、水中で吹き出したマグマが急速に冷却されたため。

南島に入島できるのは一日100人。



南島のヒロベソカタマイマイの半化石。



父島から行ける「南島」
父島南西部の南崎、南島一帯は古い火山体の裾野にあたる部分で、サンゴ礁の隆起と沈降によってできた珍しい沈水カルスト地形が特徴です。砂丘には、今からおよそ千年〜二千年前のものといわれているヒロベソカタマイマイなどのカタツムリの半化石が見られます。このカタツムリの仲間が、現在も父島や兄島、母島などに生息しており、小笠原固有種として独自の進化を遂げています。南島は自然保護のため、年末年始をのぞく11月上旬〜2月上旬は入島禁止です。

父島から行ける「南島」

父島の自然とエコツーリズム



←アカガシラカラスバト (天然記念物)

「あかぼっぼ」の愛称で親しまれているアカガシラカラスバトは、小笠原諸島全体で数十羽ほど生息が確認されています。絶滅危惧種となっていますが、運が良ければ、ハイキング中に遭遇することもあります。

チチジマカタマイマイ (固有種) →

カタツムリ的一种であるカタマイマイ属は、殻が硬く、美しい殻色が特徴。チチジマカタマイマイは、主に湿性林の林床に生息していますが、外来ブラナリアの影響により激減しています。



←ムニンツツジ (父島固有種)

野生株は、父島の躑躅山に1株のみ。小笠原の土壌でないと生育しないため、東大植物園で種子から増殖した株を父島に植え戻し、数十株の植栽株が現存しています。

ヤコウタケ (グリーンペペ) →

高温多湿な気候で自生するきのこで、暗闇で緑色に光ります。小笠原では5~11月の雨上がりの夜によく見られ、オガサワラオオコウモリの見学も含めたナイトツアーも行われています。



森林生態系保護地域で行先別に石を入れる。ガイドの同行も必要。

小笠原の エコツーリズム

1989(平成元)年、小笠原で日本初、商業のホールウォッチングが行われた際、自主ルールが定められました。これを皮切りに、クジラだけでなく天然記念物や絶滅危惧種などにも自主ルールやガイドラインが定められています。

自然を守る各種法令、ルールをまとめた冊子。



小笠原を知ることができる施設

小笠原 ビジターセンター

小笠原の歴史と自然について知ることができる施設。パネルや映像だけでなく、帆走時代の姿を復元したカヌーなども展示しています。

小笠原 世界遺産センター

世界遺産の価値や保護に関する情報を発信していく施設として、2017(平成29)年に完成。小笠原固有のカタツムリなど希少種の観察もできます。

小笠原 海洋センター

アオウミガメの保護増殖を目的とした施設。アオウミガメを間近に観察することができ、ウミガメに関する調査報告や標本の展示も。

小笠原 亜熱帯農業センター

小笠原の農業を研究する機関の拠点。東京ドーム5個分の敷地内に展示エリアもあり、小笠原の固有植物などを見学できます。

タコノキは、地上に出ている根の部分が、タコの足のように見えることから「タコノキ」と呼ばれています。戦前からタコノキは人々の生活のそばにあり、果実の中の胚乳は食用に、葉はタコノ葉細工に利用されていました。タコノ葉細工にする際は、葉を煮て干すなど加工をしてから、プレスレットや帽子、カバンなどの素材として使われています。島内数か所に体験教室もあります。

タコノ葉細工

タコノ葉細工は、小笠原の固有種「タコノキ」の葉を編み上げた民芸品。



小笠原コーヒー



温暖な気候を好むコーヒー豆は、「コーヒーベルト」と呼ばれる赤道付近を中心に栽培されています。日本はこのエリアに位置していませんが、1878（明治11）年、コーヒーベルトから少しはずれた小笠原で、国内初のコーヒー栽培が始まりました。その後、太平洋戦争によって島民は島から離れることを余儀なくされ、小笠原が日本に返還され島に戻ると、そこには野生化したコーヒーの木があったそうです。これをきっかけに20年以上手つかずだった畑でコーヒー栽培が再開され、現在は年間200kgほどのコーヒーが収穫されています。

小笠原の伝統芸能

小笠原諸島は、最初の定住者が欧米人や太平洋諸島民だったことから、さまざまな太平洋各地の文化が流入しています。東京都の無形民俗文化財に指定されている「小笠原の南洋踊り」もそのひとつ。この伝統芸能を次世代に引き継いでいく取組として、「こども南洋踊り」の指導が行われており、島の運動会で披露されています。また、八丈島から伝わった「小笠原太鼓」は、おがさわら丸が出港する際に、棧橋で披露されています。



父島のお見送り

父島名物の風景のひとつに「お見送り」があります。棧橋では小笠原太鼓が鳴り響き、お祭りのような雰囲気の中、おがさわら丸に乗船し、出港時には島の人々が「いってらっしゃい」と見送ってくれます。島民からもらいレイ（花飾り）は、海岸にたどり着くと再会できると言われていることから、出港後、海に投げる光景が見られます。また、離れていく船を追いかけ伴走する船から、海にダイブして最後まで見送ってくれる島民もいます。



国立天文台VERA
小笠原観測局



「オレンジベベ」の愛称で親しまれている電波望遠鏡アンテナで、父島では最大の建造物。

島内の森の中には、第二次世界大戦の戦跡が残っている。



まばゆいばかりの白い砂浜。海からボートやシーカヤックでのみ上陸可能。

島内アクセス

バス、タクシー、レンタカー、レンタバイク、レンタサイクル（電動アシスト付きを含む）あり

島の窓口



小笠原村観光協会

〒100-2101
小笠原村父島字東町
商工観光会館内



小笠原村産業観光課

〒100-2101
東京都小笠原村父島字西町

島めぐりコース

- 【1日目】
- 午前 二見港に到着 → 宿にチェックイン → 父島の中心地・大村のカフェで昼食
※ははじま丸で母島へ移動することも可能
- 午後 レンタサイクルで島内散歩（境浦海岸、戦跡など）→ ウェザーステーションで夕日を眺める
- 【2・3日目】
- 終日 ●海水浴、スノーケリング、ダイビング
●ホエールウォッチング（ザトウクジラ：2～4月下旬／マッコウクジラ：8～9月下旬）
●南島 散歩など
- 【4日目】
- 午後 島寿司を購入し乗船 → 二見港から出港